

T. S. Eliot 研究

—*Murder in the Cathedral* における Chorus の役割—

その 2

宮 野 祥 子

I

この小論は先に公にした拙論（‘*Murder in the Cathedral* における Chorus の役割—その 1—’ 梅光女学院短期大学英語英文学会誌英文学研究第 1 号）にひきつづき、この drama における Chorus の役割を考察しようとするものである。

先の論においては Chorus の役割として、二つの要素、二重性について次のように仮説した。

すなわち、Chorus が witness としてみつめているもの、その鋭い透察力によって見透したものは、Becket の意識の内奥にある内的存在 = soul がそのなかに置かれた内的状況であると考えたのである。だから Chorus の二重性は、内的状況としての body と、内的存在としての soul との両面価値性に基くものであると考え、Thomas Becket の神の意志へ服従しようとする soul に対して、全く対立する神への不服従の意志を発動させる body という力があらわれてくるのである、と理解した。主人公の死に到る過程は、この正負相反するものを共にもつ人間の葛藤の有様であると云えるのではないだろうか。そしてその葛藤のき中に生き続けるときの、その渦巻く力を Chorus が表わしているのである、と仮説したのであった。

この場合 Chorus の発言を次のように理解することができるのではないだろうか。Chorus の witness としての発言を二つにわけて考えることができる。その第一は witness としてもっている透察力によって、徐々に暴露されてくる魂の素裸の有様を証言する部分である。それはあらゆる関係から切り離されて実存する人間が、死に直面したときに、明らかにされてくる姿を直視して発言していると考えられる。この場合、一見この発言は Chorus の女達自身に関する発言のようにも解釈できるのであるが、証人であるという意味を考えるとときには次のように理解できるのではないだろ

うか。証 (marturia) とは、言証, 事証, 心証の三種の論理を表わすことばである¹。云いかえるならば、或る事実を、人間が真実であると認識し、そのことを人格と事象にまで対象化して云いあらわすことである。だから Chorus が証人の役割をはたすとは、彼女たちが現実に直視したものを、真実であるとして、彼女達のことばを用いて、cover したものであると云うことができよう。

Chorus の発言のその第二の部分として、第一の部分で明らかになった Becket の恐怖にみちた心の有様を知ったときに感じとられる彼女達の危険を、Archbishop Thomas Becket に向ったえ、その危険からの救いを求めている部分をあげることができる。それは Becket に Chorus の女達との関係を自覚させ、他者との関係にある彼の存在の意味を明らかにさせようとするものである。それと同時にその明らかにされてきた心の有様が、実は否定されるべきものであるとする魂の存在をも証言しているのである、と考えることができよう。

Chorus をこのように解釈することにより、この小論では人間の心にみられる両面価値対立の矛盾葛藤の有様とそれが意味するところを考察しようとするものである。さらにこのような人間性の理解が T. S. Eliot の人間観においてどのような意味をもっているのであるか、考えてみたいと思う。

II

Part I の大部分を占めている四人の Tempters の試みによって、次のようなことが明らかになった。

Becket は神の名において、この世のあらゆる権力に勝る教会の権力を握ろうとすることも、或はまた神の意志への服従という殉教死の栄光を自らの身に負うことも、神の前には等しく罪でしかあり得ない、という認識に到達したのである。

Can sinful pride be driven out/Only by more sinful?

Can I neither act nor suffer/Without perdition?

p. 40

人間の行為の裏側には人間であるが故に、否定することのできない不純なものがある。それは人間が人間であることの証明でもあるが、人間が神と等しくなることができ

きない、という認識でもあろう。Becket は ‘Can I neither act nor suffer without perdition?’ といって、anti-God 的な性向を人間の行為に認めているのである。それは人間の行為が魂によって否定されるべきものを内含していることを意味していると考えられる。そしてここで問題にされているのは、行為そのものではなくその動機であろう。善なる行動がその動機によっては悪にもなりうるということである。Becket は自分の良いと思われる行為の動機として、anti-God 的なものを認めた以上、全く否定されるべき自己を識ったと云うことができよう。だから人間の心にひそむ両面価値性の故に絶体絶命の状態にまで追いつめられている自分に、はじめて Becket は気が付いたのであると考えられる。

この自己認識は drama の Part I の最後になされているのであるが、Part II に入る前に礼拝説教が取り入れてある。それはクリスマスの朝の説教であって、そのなかに Becket の次のようなことばがある。

A martyrdom is always the design of God, for His love of men, to warn them and to lead them, to bring them back to His ways. It is never the design of man; for the true martyr is he who has become the instrument of God, who has lost his will in the will of God, and no longer desires anything for himself, not even the glory of being a martyr. p. 49

真の殉教者とは己れを捨てて捨て切って 100% 神の道具となった人間のことである。殉教者だという誉れすらも、望まない人間のことであるというのである。さてこの ‘who has lost his will in the will of God’ 神の意志のなかに、自らの意志を解消していく人間として更生したいということは、悪魔のからくり (instrument) である自己の心中のアムビバレンスを打ちくだいて専ら神のからくりとなって自分の命をささげたいと云う大決意を示すものである。そのためには、船が造船所で seaworthy に造られてから大海へ出ていくように、自分はこの大決意を不動のもの、揺ぎなきものと化して自分を deathworthy に改造してからはじめて立派なマターとして難に殉ずる覚悟である――

Death will come only when I am worthy, / And if I am worthy,
there is no danger. / I have therefore to make perfect my will.

p. 69

と発言して Becket は昂然として、その決意のほどを示した。けれどもカンタベリ大僧正として位人臣を極めていたベケットも一皮剥いてみれば悪魔のからくりに対しては弱い弱い下凡のひとり人間にすぎなかった。死は彼がまだ deathworthy とならない内に彼におそいかかった。そして彼は惨殺された。悪魔のからくりに対する人間の抵抗力の弱さ！あわれと云うも愚かなりとわれらの祖先が云ったのはこのことか。

What is the sickly smell, the vapour? the dark green light
from a cloud on a withered tree? The earth is heaving to
parturition of issue of hell. What is the sticky dew that forms
on the back of my hand?

p. 41

さて、この Chorus の胸の悪くなるような臭いとか、地の底から闇の力に支配されたものの子たちが吐出されてこようとしている、ということばから、不吉なものの世界があらわれようとしていることがわかる。それは「人の子」の誕生ではなくて、闇の力に支配された悪魔の弟子たちの誕生である。次の引用にはそのものの姿が明らかにされている。

God is leaving us, God is leaving us,…… / The forms take
shape in the dark air:/ Puss-purr of leopard, footfall of padding
bear, / Palm-pat of nodding ape, square hyaena waiting / For
laughter, laughter, laughter. The Lords of Hell are here. /
They curl round you, lie at your feet, swing wing through the
dark air.

p. 43

息苦しくなるような絶望の気配のなかに、甘い飽き飽きするような香りがたちこめて、今 'the Lords of Hell' 地獄の主達が誕生する。それは豹や熊や猿やハイエナ

という動物達で象徴されている。しかもあざ笑う時がやってくるのを待っているということばは、それらが征服して勝利をおさめる時のくることをあらわしているであろう。地獄とは神の意志より離脱した世界、そしてその世界に住む主達は神に対立する力である。この ‘the Lords of Hell’ のことを、Becket を殺害する knights のイメージである、とする見方もある²⁾。しかしながら drama のこの場面においては、まだ Knights の登場は明らかにされておらず、仮りにそのように考えられるにしても、あまりにも公式的ではないであろうか。さらに、Becket の心の中で死ということは一度否定されている場面であるからには、何らかのイメージとして直接に考えられるのは、Tempters のそれであろう。Tempters が誘惑するものであるかぎり、その役目は主人公の魂のなかにある可能性をひき出すことである。そして主人公の魂の現実の様相を逆に照し出し、照し返すものである。だから Part I における temptation の内容が Becket の魂の真の有様をあらわしている、ということができるのではないだろうか。Becket が地獄の主達に囲まれているというこの Chorus は、temptation によって明らかにされた、Becket の心の中にある神に対立することのできる力が魂が支配されていることの象徴として考えられよう。それは世の人々の救いとなるような魂の有様ではなく、神にそむき反抗することのできる魂である。opening Chorus で期待されていた何か恐ろしいこと、何か新しい運命というのは、人間の魂がこの地獄の力に支配されようとしていることが、赤裸々にあらわれてくることであった、と考えられる。

この ‘the Lords of Hell’ の力が、Part II においては具体的な死をもたらす Knights の登場により、再びあらわれてくる。次の引用には、同じく動物達がその象徴として用いられていることがわかる。

I have smelt them, the death-bringers, senses are quickened /...
The heaving earth at nightfall, restless, absurd. I have heard /
Laughter in the noises of beasts that make strange noises; jackal,
jackass, jackdow; the scurrying noises of mouse and jerboa; the
laugh of the loon, the lunatic bird. p. 66

この光景は先の嘲笑するときを待っていた地獄の主達の場面を継承していると考えられる。何故ならば、大地がふくれ上ることばや、動物達の騒々しさなどは、先の場面と共通しており、私はあざ笑う動物達の声を聞いたということばに、明らかにそのつながりを読みとることができる。さてこの Chorus は初めて登場した Knights と Becket との間答の後に設定されている。だから ‘the death bringers’ とは具体的には Knights を意味しているのであろう。しかしこの場合文脈によれば、‘beasts’ のことも意味しているのである。すると、‘beasts’ と ‘Knights’ とが、その象徴するところが一致しているといえるのではないだろうか。では ‘Knights’ と ‘beasts’ とがもっている等質性とはどのようなことであろうか。先に述べた如く、地獄の主達はその根源を Tempters に求めることができる。そして Tempters は Becket の魂の隠れたる神にそむく力をあらわしていることが明らかになった。そうであれば、‘beasts’ すなわち ‘the death-bringers’ のもっている意味は、Becket の魂の中にある神に対立する力をあらわすことである。従って、‘beasts’ と同じ意味をもっている Knights はこの世の王の手先、権力と栄光の手先であると同時に、Thomas Becket の魂のなかにある神にさからう力の具象化されたものであると云えよう。このように考えるならば、Thomas Becket の死は、人間の魂のなかにある神に反抗しようとする力の故に起り得ることからであると理解されるのではないだろうか。

さてこの神に対立する力は、それ自身生命のあるものとして証言されている。つまり獣達は生命をもち、人間を征服しようとするものとして、発言されている。Chorus のなかにみられる女達の驚愕と興奮のなかにその力があらわれている、と考えられよう。

I have eaten / Smooth creatures still living, …… / …… and they
live and spawn in my bowels, and my bowels dissolve in the
light of dawn. …… / …… I have seen / Trunk and horn, tusk
and hoof, in odd places; / I have lain on the floor of the sea
and breathed with the breathing of the sea-anemone p. 67

この Chorus の、人間が海の生物をなまのまま食べると、それは夜の闇のなかで繁殖し、人間の腸は夜明けの光が射し染めると溶けてなくなってしまう、ということ

ばかり、人間が動物達に征服されて、人間が人間でなくなることを証言していることがわかる。身体の奇妙なところに牙やひずめが生えてくるとは、人間が動物に変体することであろう。それは意識のない生物に人間が身をまかせて、人間としての魂を見失うことである。獣性つまり神に抗う力に支配されて、人間の墮落、人間の退行が起ることであろう。

人間がこの力に支配されて、墮落していること、野獣性にまで退行していることが明らかになると、人間の一見美しい行為のなかにも、眼をそむけたくするような醜さのあることが証言されている。

I have smelt / Death in the rose, death in the hollyhock,…… I
have smelt / Corruption in the dish,…… a hellish sweet scent in
the wood-path p. 67

美しい花や食物は、人間にとっては喜びであり、良いことと考えられるものを意味している。けれどもそれから死の臭いや腐敗の臭いがするということになると、その喜びはまさに抹殺され、否定されてしまって、その喜びのなかに胸の悪くなるような、嘔吐を催すような不快な感情が共存しているものと見なくてはならない。つまり一つのことがらのなかに、まったく逆の可能性を孕んでいるということになるであろう。このことは Becket が神の御心に一致しているという認識によって選びとる道一神の意志への服従という美しい行為のなかに、それを否定してしまうような可能性がひそかに内蔵されてあることを意味するものではなからうか。

先に述べた如く、Becket は彼の死によって、逆に自分の義しいことを認めているのである。そのことは、人間のもっている我執が、価値のある死を死ぬるという自己肯定によって、明確な自我として形をとってくると考えられるのではないだろうか。その自我は 'the Lords of Hell' の象徴するように、神に対立する力として証言されている。これが Chorus の証言している魂の有様の一面であると云えよう。

Ⅲ

Chorus にはまた別の一面がある。

They curl round you,…… / O Thomas Archbishop, save us,
save yourself that we may be saved; / Destroy yourself and we
are destroyed p. 44

‘They’ とはⅡにおいて述べた ‘the Lords of Hell’ のことである。この引用の部分は、Becket の自己認識の裏側から地獄の主達が浮び出てくることを発言した Chorus に続くものである。‘save’ とはこの地獄の主達からの救いである。‘us’ ということばは、Chorus の掃除女達のことを直接に云いあらわしているということもできる。しかし地獄の主達にとり 囲まれているのは、Archbishop Thomas Becket であってみれば、この ‘save us’ ということばは Becket の魂の別の一面を云いあらわしていると考えられよう。つまり地獄の主達に 囲まれている Becket を危険であると知り、その破滅から救われなければならぬという Becket の認識を Chorus が自分達の身体をとおして、証言していると考えられる。この判断は赤裸々になってきた魂の有様は否定されなければならぬとことを意味している。Ⅱで述べた如く、地獄の主達は神に対立する力をあらわしているのであるから、その力を否定するということは、神の意志への肯定の態度をあらわしていると云えるのではないだろうか。さらに、あなたが自滅すれば私達も破滅します、という Chorus のことばは Becket と Chorus の女達との関係をあらわしている。Chorus の女達は自分達に対する彼の責任を問ひ、その自覚をうながしているということができよう。それは Becket が他者との関係にある自己の責任の認識を促がされているということが出来る。Archbishop として神に仕え、教会に連なる人々に救いを伝える者としての Thomas Becket の責任が問われているのである。だから、Becket にとって他者とは、掃除女達に代表されるあらゆる人間であり、ひいては彼と女達との関係を支える神であるということができよう。何故ならば、神という概念がなければ、つまり Becket が神とのかかわり合いをもっていなければ、女達との関係は成立しないからである。神へ志向する Becket であって、初めて彼と掃除女達との間に、‘save’ ということばに意味が生ずるわけである。このように考えるならば、上記の引用の部分は、神との関係にある Becket の魂にあっては、地獄の主達は否定されなければならぬと判断されていることを証言することになる。

さて以上述べてきた Chorus と同質の証言を次の引用にみる事ができる。

Nothing is possible but the shamed swoon / …… I have
consented, Lord Archbishop, …… / Am torn away, subdued,
violated, / United to the spiritual flesh of nature, / Mastered
by the animal powers of spirit, / Dominated by the lust of
self-demolition, / ……O Lord Archbishop……forgive us. p. 68

これはⅡにおいて述べた、人間が獣に征服され、人間の墮落と退行が起っていることを証言する Chorus に続く部分である。この Chorus の生々しい叫びは獣達からの解放を強く願っているものと見るべきである。人間が良いと考えることのなかに、人間の我執はそれを否定する契機として存在することが明白になってしまった今は、どうすることもできない。ただ目をそむけて、この凄絶な現実を忘れようとするか、或はまた耐え得ないで気絶してしまうしかない。自らを放棄して、この地獄の獣達に身をまかせて、堕ちてゆこうかという欲望にとりつかれ、実りのない空しい恥辱に終る忘我の境に身をまかせる、というこの Chorus には、そのような力に負けてはならぬという願いがある。それは人間性が疎外され抹殺されている現状から人間性が回復されることへの願望を示すものに外ならないのだと考えられる。そして ‘forgive us’ と発言されているときに、この願望もまた、神へ仕える Thomas Becket へ向けられているのである。先に述べた如くそのことはまた、神との関係にある Becket の魂を証言しているのである。神に向って赦しを求めなければならぬ人間の魂であることを知っている Becket の魂を証言しているものだと考えられる。

さて Knights の追求を逃れて、Cathedral へと僧侶達が Becket を伴う時の Chorus には、死の有様が証言されている。それは神の祝福によって昇天する喜びに満ちた死の有様ではない。魂に神に対立する力をもっている Becket の迎えようとしている死の有様は、人間の耐え得ない暗黒の世界であると証言されているのである。

Into dust on the wind, forgotten, unmemorable; only is here
/ The white flat face of Death, God's silent servant, / And
behind the face of Death the Judgement / And behind the
Judgement the Void, p. 71

その世界には身体をひき裂かれるよりも、脳天を打ちくだかれるよりも、もっと恐ろ

しいものがある。それは死の青白い顔の向うからやってくる、地獄よりも恐ろしい虚無の世界である。‘Emptiness, absence, separation from God’ であらわされている、神の不在の国、神の手からすべり落ちた世界である。その世界では人間は精神の錯乱によって、幻のなかに逃げ込むことも、夢をみて現実をぐまかすこともできない。人間はそのなかに浮いている一片の塵にすぎない。ここにはその魂のためにとりなしをしてくれる者は誰ひとりなく、‘dust I am, to dust am bending’ という嘆きを聞きとどけてくれる者はいない。

これが証言された死の有様である。この死の有様は神の前に栄光の輝きのうちに召される殉教者のそれではない。仮りに、Becket を殉教者ということば通りに解釈するならば、ここには少なくとも、神が不在する世界は出現してはならない筈ではないだろうか。Knights によって、神に服従したために殺害される Becket の迎える死の有様は、少なくとも輝かしい望みの世界でなければならないはずである。このように考えるならば、ここに証言されている Becket の死は、ひとりの人間として、おのれの両面価値性を捨てきれぬ故に、神の前に出ることのできないものとして証言されている、としか解釈のしようがない。このことはⅡに述べた如く、Knights の意味していることから考えると、明らかになってくる。

だから Becket の流す血潮は一度洗い流されねばならない汚れたものとして発言されているのは当然であろう。Thomas Becket が殺害される時の Chorus によれば次のようである。

Clear the air! clean the sky! wash the wind!…… / The
land is foul, the water is foul, our beasts and ourselves
defiled with blood. / A rain of blood has blinded my
eyes.…… / I wander in a land of barren boughs: if I
break them, they bleed; I wander in a land of dry stones:
if I touch them they bleed. p. 76

この Chorus には Becket の死がもたらす世界が説明されている。それは洗い浄めねばならない世界である。枝に手をかけたなら血が流れ、石をひろえば血潮がしたり落ちる国である。岩をうがち、皮膚も筋肉も剥ぎ取って徹底的に身体の中から

浄めねばならぬ。人間はこの血潮で盲目となり、この不毛の地をさまよいつづけている放浪者であると証言されている。ここには自分を悪魔のからくりにならせて神に反むく悪魔の弟子と化けてしまった人間の行末が象徴されているものと云えよう。

IV

このようにして Chorus は死に到る Becket の魂の内奥の葛藤の有様を述べ、その死の意味を伝えているものと考えられる。Chorus は Becket の魂には神に対する魂のあこがれ、希求があることと共に自己の内面の両面価値性の執着の逞しさを証言している。その我執は神に対立する力として述べられている。さらに Chorus は自己に対する我執は否定されるべきものであり、その力に支配されている人間は神に見捨てられた虚無の世界に、さまよわねばならぬことを証言しており、換言すれば、人間存在に特有な両面価値性への証言であるということができよう。

さらにこのことから、Eliot の人間観が二元的な資質を認めていると理解できるのではないだろうか。即ち人間は神に対して肯定的存在であり、同時に否定的存在であることを認めていると考えられるのではないだろうか。Saint Thomas Becket を主人公とする drama において、このような否定的な面をもつ人間像を形象したということは、Eliot の人間観に大切な意味を付与するのではないかと考えられる。そこには、神に反抗する魂の道程として、絶対的否定としての死に到らねばならぬ現実の人間の姿がある。それは不毛の荒地をさまよいつづける盲目の放浪者というイメージで与えられている。この人間像はさらに他の作品においては、どのようにあらわされているかを見きわめるのが今後のわたくしの課題であると思われる。

さて、Thomas Becket は Saint である。最後まで Saint であらねばならぬことは歴史的事実である。だが神の祝福により栄光のなかに生き続ける Saint と、この drama に理解された荒地をさまよう盲目の放浪者というイメージとの間には深い断絶が認められる。この断絶はまた、Becket の死に際しての Chorus と、終幕の Chorus との間にも認めることができるのではないだろうか。Eliot はこの二つの Chorus の間に、現代の観客に訴える Knights の弁明³を設定することにより、歴史的に生き続けている Saint Thomas Becket というイメージを巧みに利用している。即ち Eliot は観客の持っている Saint というイメージを観客に借りているので

はないだろうか。そして終幕で、いわば伝統的な教会の精神に Becket の実存の姿を溶かし込んでしまったと考えられるのではないだろうか。終幕の Chorus が一変して、神へ感謝をささげ、讃美し、慈悲を求める祈りで終始していることを、このように理解したいと思う。終幕の Chorus を引用するならば、

We praise Thee, O God, for Thy glory displayed in all the creatures of the earth, / …… Thy glory is declared in that which denies Thee; …… / We thank Thee for Thy mercies of blood, for Thy redemption by blood. For the blood of Thy martyrs and Saints / …… Shall create the holy places. …… / From such ground spring that which forever renews the earth / Though it is forever denied. p. 85-87

の如くであって、ここには神を否定するものも実は神の栄光をあらわすために存在するのであり、永久に否定され続けようとも、聖者や殉教者の生涯は永遠に生命をもちつづけているという感謝が歌われている。ここでは永久に否定されるべきものの力も、それが結果においては、‘soul’ の力を触発する契機となることによつて、神の意志の実現にその力を合わせることとなるのである。つまりカーライルのいう永遠の否定から永遠の肯定にうつりゆく途上の有意義なるインシデンツのひとつとしてベケット聖人の死も歴史的には甚だ高く評価されているのだと思われる。

ともあれ Chorus の役割は、実存する者に与えられてある否定と肯定との二重の主観性をあらわしている、ということができよう。その一は、あくことなく追求される自我が、結局神に対立する力として認識されることである。その力は地獄の主達という動物達で象徴されている。さらに一方は、このような主観が、状況つまり神というものの現前する状況においては否定されるべきものとして認識されていることである。それは荒地をさまよう盲目の放浪者で象徴されている。この二重の主観のなかで、選択されることなしに矛盾のさなかに生き続けている人間を証言することであったと考えられる。さらにその実存する人間の矛盾が、そのまま肯定へと逆転する「曠劫未明」の世界の現前を暗示することでもあった、と考えられるのではないだろうか。

- 註1 中村獅雄, 基督教の哲学的理解, p. 334
註2 Grover Smith, Jr., *T.S. Eliot's Poetry and Plays*, p. 191
註3 T.S. Eliot, *Poetry and Drama*, p. 25